

スリランカ

なか むら ひさ し
中 村 尚 司

I 研究状況

1977年の政権交替とともに、スリランカに対する日本政府の経済協力は急速に増大し、人口当りで比較すると ASEAN 諸国と肩をならべるようになった。これに対応して、スリランカ経済に関する調査研究に従事する人員や、印刷される報告書の点数もまた、経済協力事業の一環として行なわれるものの比重が著しく高まっている。国際協力事業団や海外経済協力基金をはじめとする政府機関の派遣調査団、各種の公益的法人による受託調査、コンサルタント企業による実施設計などである。これらの報告書は残念なことにその多くが非公開であり、一般には利用の道が閉ざされている。しかし、経済協力に関する情報公開の重要性は、今後ますます大きくなるであろうと思われる。

経済協力事業については中村尚司の講演記録要旨「日本とスリランカの経済関係」〔24〕が、政府開発援助の問題点をとりあげている。これと関連して、鶴見良行「エビとテレビ」〔22〕、村井吉敬「アジアにおける経済協力」〔33〕、小倉武一「経済協力のあり方を考える」〔7〕などによる発言がつついた。しかし、論議は十分に尽されないままに中断している。

1978年以降の研究状況の特色として、上記の経済協力関連の調査を別にすると、まずシンハラ語への関心の高まりがあげられる。英文資料のみへの依存から脱却する有力な手がかりとして、野口忠司『シンハラ語入門』〔29〕とウダガマ；南『シンハラ語会話教本』〔3〕が公刊された。シンハラ語やタミル語によるフィールド・ワークを重視する人類学研究の対象として、スリランカ社会が選ばれることが多くなった状況とも対応している。これにはスリランカ研究への関心の高まりとは別に、インドにおけるフィールド・ワークに必要な査証の発給が得られにくくなっている、という外的な要因も大いに影響している。

スリランカ社会に関する単行本が、商業出版の形で刊行されるようになったのも、最近の特色である。いずれも、南方上座部仏教を主軸としながら、多民族、多言語、多宗教の社会集団が、平和的に共存し、協力しあっている様相が描かれている。新聞報道に見る民族対立の激化と異なった印象を与えるかもしれない。断片的な新聞報道に対する中和剤としての役割を果たしているともいえる。その主なものは、ヘンリー・パーカー著 サミュエル淑子訳『セイロンの民話』〔32〕、ジョアンナ・メーシ著 中村尚司監訳『サルポーダヤ——仏法と開発——』〔14〕、青木保編著『聖地スリランカ』〔1〕、岩田慶治編著『スリランカの祭』〔2〕、

大田有旗『スリランカの旅』〔6〕、庄野英二『象とカレーライスの島』〔15〕、那谷敏郎『スリランカの三宝』〔28〕、中村禮子『わたしのスリランカ』〔27〕、畑正憲『象の国スリランカ』〔30〕、林正巳『スリランカ・モルジブ』〔31〕、吉川八郎『日本とスリランカに架ける橋』〔35〕である。なお、中村尚司『地域と共同体』〔23〕も後半部分は、スリランカ社会論で構成されている。

1977年以来、日本の大学や研究機関が研究者を組織して、スリランカの学術調査を長期的に実施する動きが目立っている。ほとんどの学術調査にスリランカの研究者が参加しているのも、新しい傾向である。その報告も次第に英文で発表されることが多くなり、日本における外国研究という限定が不要になる可能性をもち、世界におけるスリランカ研究の一環として位置づけられるようになるであろう。その主な研究グループを紹介すると次のとおりである。アジア固有法研究会（千葉正士）、愛知学院大学（前田恵学）、大阪大学人間科学部（青木保）、京都大学東南アジア研究センター（高谷好一）、国立民族学博物館（岩田慶治）、筑波大学地球科学系（吉野正敏）、東京大学経済学部（大内力）、広島大学文学部（藤原健蔵）、法政大学探険部（執行一利）などである。これらの研究グループによるスリランカの研究者との共同研究が、長期的に継続され、研究交流の実をあげることを望みたい。

II 主要な業績

経済史研究では、家島彦一「マムルーク朝の対外貿易政策の諸相」〔34〕が、アラブ側の史料にもとづき、13世紀におけるスリランカ・アラブ関係史に新しい光を投じている。不明な点の多かった

シンハラ王国の国際関係研究に対する重要な貢献である。植民地時代の土地制度史に関して、末永洋一の「スリランカ土地制度史研究のための覚書」〔16〕をはじめとする一連の論考は、既存の諸研究に対するていねいな検討作業であり、完結すれば社会経済史研究への基礎視角を提供するものと期待される。

タミル民族問題が多くの研究者（とくに若い研究者）の関心を集め、数多くの論文が発表されている。タミル人移民については、杉原薫「インド人移民とプランテーション」〔17〕と「世界資本主義とインド人移民」〔18〕および内田誠「セイロンにおけるインド人移民問題」〔4〕が、農園労働者以外の移住労働者に注目して、その重要性を指摘した。ジャヤワルダナ政権下で激化しつつある民族対立については、「人種暴動」として扱う新聞報道に影響されてか、斎藤吉史「スリランカ——人種対立の泥沼に陥ったモザイク国家——」〔8〕のように人種概念で解釈しようとする論文が跡を絶たない。そのなかで、スリランカでの研究動向をふまえながら、人類学からのフィールド・ワークの成果も活用して、民族問題の考察にとりくんでいる渋谷利雄の一連の業績が、最も注目に値し、かつ説得力に富んでいる。主な論文を掲げると、「スリランカの仏教復興運動と日本」〔10〕、「スリランカの儀礼劇と社会変動」〔11〕、「スリランカ民族問題の歴史的背景」〔12〕および「スリランカの民族問題」〔13〕である。スリランカのタミル民族問題を在日朝鮮人問題と比較して論じた山本真弓「インド人移民と在日朝鮮人」〔36〕と「在日朝鮮人と言語問題」〔37〕は、独自の視点を与えてくれる仕事である。

法社会学と人類学との共同研究を行なっている千葉正士の研究グループは、法社会学会で「アジ

ア固有法の研究」〔21〕という題で中間報告を行なっている。人類学的調査の成果は、前述の青木〔1〕と岩田〔2〕とにその一部が収められている。経済学の方からみて興味ぶかい研究として、谷口佳子「低地シンハラ人の伝統、村落、工場労働」〔20〕と高桑史子「スリランカのシンハラ漁民社会概観」〔19〕がある。工場労働や漁業労働についての本格的な研究成果に結実する日が待ち望まれる。

中小企業の特質については、中村尚司「スリランカの産業政策と中小企業」〔26〕が、最近の動向を伝えている。農業については、佐藤孝夫他『スリランカの農業』〔9〕が概観を得るのに便利である。村落調査による農業経済研究として、大内力他『スリランカの稲作農村』〔5〕があり、ドライ・ゾーンの溜池利用、入植事業およびウェット・ゾーンの山村のくわしい事例報告を行なっている。農業水利史を検討した中村尚司「貯水システムに関する考察」〔25〕は、ストックの反復利用を重視する立場から、過剰開発に関する理論化を試みたが、未完の中間報告にとどまっている。

〔文献リスト〕

- 〔1〕 青木保編著『聖地スリランカ』日本放送出版協会 1985年。
- 〔2〕 岩田慶治編著『スリランカの祭』工作舎 1982年。
- 〔3〕 ウダガマ・スマンガラ 南清隆『シンハラ語会話教本』永田文昌堂 1985年。
- 〔4〕 内田誠「セイロンにおけるインド人移民問題」(『千里山経済学』第19巻第1・2号 1985年12月)。
- 〔5〕 大内力他『スリランカの稲作農村』(東京大学経済学部日本産業経済研究施設報告37) 東京大学出版会 1980年。
- 〔6〕 大田有旗議『スリランカの旅』三修社 1980年。
- 〔7〕 小倉武一「経済協力のあり方を考える」(『エコノミスト』1983年1月4日)。
- 〔8〕 斎藤吉史「スリランカ——人種対立の泥沼に陥ったモザイク国家——」(『国際問題』第304号 1985年7月)。
- 〔9〕 佐藤孝夫他『スリランカの農業』国際農林業協力協会 1980年。
- 〔10〕 渋谷利雄「スリランカの仏教復興運動と日本」(長崎暢子編『南アジアの民族運動と日本』アジア経済研究所 1980年)。
- 〔11〕 渋谷利雄「スリランカの儀礼劇と社会変動——ソカリと民族暴動——」(『アジア経済』第26巻第1号 1985年1月)。
- 〔12〕 渋谷利雄「スリランカ民族問題の歴史的背景」(『アジア・アフリカ言語文化研究』第30号 1985年)。
- 〔13〕 渋谷利雄「スリランカの民族問題——1983年の暴動をめぐって——」(中村平治編『アジア政治の展開と国際関係』アジア・アフリカ言語文化研究所 1986年)。
- 〔14〕 ジョアンナ・メーシ著 中村尚司監訳『サルボダーヤ——仏法と開発——』めこん社 1984年。
- 〔15〕 庄野英二『象とカレーライスの島』あかね書房 1984年。
- 〔16〕 末永洋一「スリランカ土地制度史研究のための覚書」(1), (2), (3) (『青森短期大学紀要』第11巻 1977年3月, 『青森大学・青森短期大学研究紀要』第2巻第1号 1979年10月, 第3巻第1号 1980年10月)。
- 〔17〕 杉原薫「インド人移民とプランテーション」(『社会経済史学』第47巻第4号 1981年12月)。
- 〔18〕 杉原薫「世界資本主義とインド人移民」(社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』1984年)。
- 〔19〕 高桑史子「スリランカのシンハラ漁民社会概観——Alexander, P. の研究から——」(『南島史学』第23号 1984年4月)。
- 〔20〕 谷口佳子「低地シンハラ人の伝統、村落、工場労働——スリランカ南部農村調査予報——」(『民族学研究』第47巻第1号 1982年6月)。
- 〔21〕 千葉正士「アジア固有法の研究——スリランカ調査中間報告——」(日本法社会学会編『法社会学』第36号 1984年)。
- 〔22〕 鶴見良行「エビとテレビ」(『思想の科学』第21号 1982年8月)。
- 〔23〕 中村尚司『地域と共同体』春秋社 1980年。
- 〔24〕 中村尚司「日本とスリランカの経済関係」(『アジア研ニュース』第18号 1982年1月)。

- [25] 中村尚司「貯水システムに関する考察——スリランカ灌漑農業論の試み——」(『東洋文化研究所紀要』第96冊 1984年11月)。
- [26] 中村尚司「スリランカの産業政策と中小企業」(『龍谷大学経済経営論集』第25巻第4号 1986年3月)。
- [27] 中村禮子『わたしのスリランカ』南雲堂 1985年。
- [28] 那谷敏郎『スリランカの三宝』平凡社 1978年。
- [29] 野口忠司『シンハラ語入門』大学書林 1984年。
- [30] 畑正憲『象の国スリランカ』サンケイ出版 1982年。
- [31] 林正巳『スリランカ・モルジブ』古今書院 1979年。
- [32] ヘンリー・パーカー著 サミュエル淑子訳『セイロンの民話』大日本絵画 1979年。
- [33] 村井吉敬「アジアにおける経済協力——現状と問題——」(『東亜』第185号 1982年11月)。
- [34] 家島彦一「マムルーク朝の対外貿易政策の諸相——セイロン王 Bhuvanaikabāhu とマムルーク朝スルタン al-Mansūr との通商関係をめぐって——」(『アジア・アフリカ言語文化研究』第20号 1980年)。
- [35] 吉川八郎『日本とスリランカに架ける橋』コア出版 1983年。
- [36] 山本真弓「インド人移民と在日朝鮮人」(『季刊三千里』第39号 1984年8月)。
- [37] 山本真弓「在日朝鮮人と言語問題」(『季刊三千里』第44号 1985年11月)。

(龍谷大学教授)